

4月25日、およそ1年半にも及ぶ修理と周辺整備を終え、万田坑がついに一般公開される。「九州・山口の産業遺産群」の一構成資産としてユネスコの世界遺産一覧表掲載を目指す万田坑だが、地元暮らしわたしたちは万田坑について、他市の人にどれだけ語れるだろうか。

産業遺産である万田坑。そこには世界遺産候補となるべき、深い歴史がある。

知っていることも知らないことも、まだたくさん眠っている荒削りの宝。それが万田坑だ。

短期間で先進国の仲間入りを果たした日本が歩んだ近代化への歴史の一面を語る、

光も闇も併せ持つ万田坑と三池炭鉱。

今はまさに、この歴史を世界共有の歴史として伝えていく千載一遇の機会だ。

石炭とともに歩んだこの「わがまち荒尾」を知り、日本の近代化を学ぶ道しるべ、万田坑。

この世界遺産登録への動きをきっかけに、より身近に感じ、荒尾をもっと伝えたい——

「荒尾の宝」万田坑と三池炭鉱の歴史を、ここに少しだけ紐解いてみる。

Special Close up 1

三池炭鉱・万田坑 108年のあゆみ

一、三池炭鉱の歴史

三池

炭鉱の発見は、1469（文明元）年にさかのぼるとの伝承がある。江戸時代には柳川藩家老の小野氏が1721（享保6）年から採掘を開始し、主に瀬戸内地方の製塩用燃料として販売された記録が残っている。

三池炭鉱は、明治初期に明治政府が直轄する炭鉱になり、それ以後、近代的な手法を導入することで大規模に開発され、わが国最大の炭鉱へと飛躍・発展していく。また、1884（明治17）年、マサチューセッツ工科大学で当時最新の鉱山技術を修得してきた團琢磨が三池の地に赴任してきたことは、その後の三池炭鉱の発展に大きな影響を与えることになる。

官営（国営）時代に開かれた主な坑口には、大浦坑、七浦坑、宮浦坑（以上、大

牟田市）があり、官営期に掘り始められ、1889（明治22）年に三井に払い下げられた後に引き継がれたものに勝立坑（大牟田市）がある。宮原坑（大牟田市）、万田坑（荒尾市）は、勝立坑に

次いで三井によって開かれた主力坑で、それぞれ明治後期から大正期、大正期から昭和前期に活躍していた。万田坑以降に開かれた主力坑としては四山坑、三川坑、有明坑がある。わが国の復興に大きな役目を果たしたものの、労働争議や爆発事故を経てエネルギー革命後はその経営は苦境に立たされ、外国炭との価格差のため経営は厳しさを増す一方となった。

三井三池炭鉱は平成9年3月閉山し、三井経営108年、官営時からは124年という近代炭鉱としての長い歴史に幕を下ろした。

明治

荒尾

市と大牟田市にまたがる万田坑

は、当初官営であった三池炭鉱が、1889（明治22）年に民営として操業開始した後に、宮原坑に次いで開発された炭鉱である。宮原坑の南約1.5キロの位置に開かれた万田坑は、当時わが国の炭鉱の模範とすべく、三井の総力を挙げて整備された坑口だ。

1897（明治30）年に第一堅坑の開削着手後、1899（明治32）年に「総鉄骨造」の櫓が完成し、1902（明治35）年に採炭を開始した。現存する第二堅坑は、1898（明治31）年に開削着手後、1908（明治41）年に完成した。

それまでの炭鉱の櫓は、木材を主に用いて建設され、鋼材は接合部分などの補強のため部分的に使用されるのが一般的だった。万田坑は、三井三池炭鉱での鉄骨櫓構造物として初めてのものである。

また、当時の鉄骨は、政府や

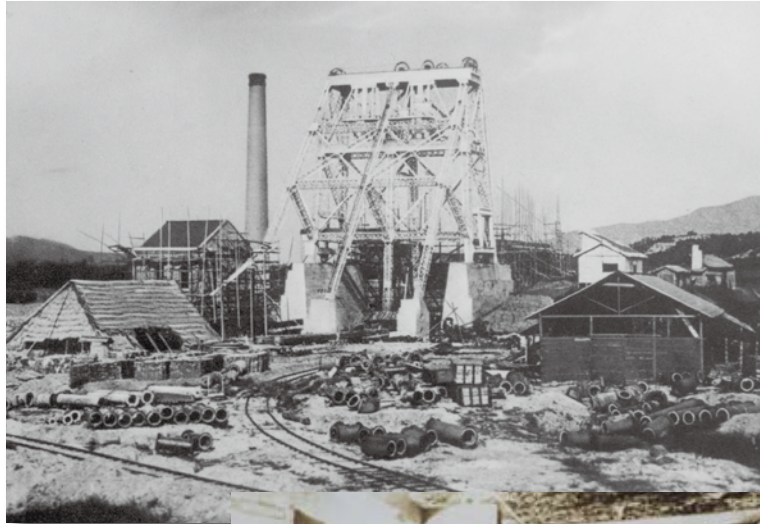
財閥が関与した事業に使用されるような高価な材料であり、

当時の万田坑建設の重要性がみてとれる。その他、1908

（明治41）年に三池港（大牟田市）が完成し、炭鉱とそれを結ぶ専用鉄道が開通するなど、三池炭鉱全体のインフラの

整備も急速に行われた。

このように万田坑は、近代化の勃興期の日本にあつて、最新技術の導入と莫大な資本を積極的に投入されて、当時のアジア地域を代表する炭鉱となつていった。



▲ 明治31年頃 建設中の万田坑第一堅坑櫓 ※



▲ 大正12年頃 坑内厩舎 ※



▲ 四山坑と桜（撮影時期不明 撮影・提供：長南久太氏）

大正

期は、万田坑での石炭の生産が非常に活発化した時期であり、多くの施設が増設された。

さらに、当初施設で使用していた主要な機械類は、ほとんどが西洋からの輸入製品だったが、大正期になると、三井三池製作所などで優秀な国産の機械が製作されるようになった。排気を利用した万田発電所を新設するなど、蒸気汽罐がだんだんと電気動力に変更され始めるもの（の）時期である。短かった大正時代だが、三池

炭鉱にとつては最盛期にあたり、その繁栄のための多くの技術的変革が行われた時期でもあった。

現存する万田坑のほか、かつて荒尾市にあったもう一つの炭鉱「四山鉱」が開削と操業を開始したのもこの時期である。

四山鉱は、万田坑や宮浦坑内での通気不良や温度の上昇など、労働環境の悪化を改善するため、そして将来の三池炭鉱を維持する炭鉱として計画された海底下での石炭採掘を目的とした施設だった。第一堅坑と第二堅坑があり、いずれもコンクリート製で、それまでの蒸気力から、初めて電力を動力とした当時の国内最大級の巻揚機が備えられていた。特に第一堅坑櫓の46メートルを超える高さは東洋一を誇り、昭和初期の出炭量は年間40万トンを超え、三池炭鉱の主力坑の一つであった。

大正

昭和以降



※は「三井鉱業所沿革史」から抜粋した写真（提供：三井文庫）

◀昭和7年頃 万田坑全景 ※

▼昭和20年～30年前半頃 採掘中止以降の万田坑全景
(写真提供：三井鉱山株式会社（現 日本コース工業株式会社）)



昭和 期に入ると、三池炭鉱の出炭量はピークを迎え、太平洋戦争のさなかの1944（昭和19）年には年間400万トンを超えた。1945（昭和20）年の終戦後、敗戦による混乱によって出炭量が大きく落ち込んだが、その後1950（昭和25）年の朝鮮戦争開始によって、石炭の需要が増加した。

1951（昭和26）年、万田坑は採炭効率が低下したために採炭を終了し、坑内のメンテナンスのための施設となった。1954（昭和29）年に第一堅坑槽が解体されるなど、諸施設の解体が進んだが、第二堅坑は揚水や坑内管理のため、機能が維持された。1955（昭和30）年頃から日本は高度経済成長を迎え、敗戦からの復活を遂げたが、同時に国内のエネルギー政策の転換が行われ、石油がエネルギーの主力となり、徐々に出炭量は減少していった。三池争議という大規模な労働争議が繰り広げられたのもこの時期である。このような世相の中、外国産の石炭との価格差が広がったこともあり、国内の炭鉱経営は厳しさを増した。そして、1997（平成9）年、三井三池炭鉱は閉山し、明治の官営期から124年間続いた近代炭鉱の歴史に幕を下ろした。

万田坑の歴史

そして未来

世界遺産登録へ



万 田坑は、現在三池炭鉱に現存する、明治・大正期における最大級の施設で、第二堅坑槽（やぐら）や巻揚機室をはじめ、倉庫及びポンプ室、安全灯室及び浴室、事務所、山ノ神祭祀施設などが保存されている。これらは我が国の近代化に大きな役割を果たした三池炭鉱の、当時の優れた技術を伝えているため、1998（平成10）年5月1日、国の重要文化財に指定された。

また第一堅坑跡、汽罐場跡、坑内トロッコ軌条、職場、プラントホームなどが残存し、炭鉱の採炭、選炭、運炭のシステムが分かるため、炭鉱施設としてはわが国では唯一、2000（平成12）年1月19日、国史跡に指定された。

さらに、大牟田市の宮原坑などとともに九州、山口の6県10市で構成する「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産として、2009（平成21）年1月5日にユネスコの世界遺産暫定リストに掲載され、世界遺産の本登録を目指している。

「世界の宝」となるべく万田坑が走り出すのが、この4月。あなたが未来への新たな一歩の目撃者になるかもしれない。